

清水泰先生略歴並著書（「立命館文学」第一七〇・一七一号より抄出）

- 一、明治二十七年一月二十八日出生
- 一、大正十四年三月 京都帝国大学文学部文学科卒業
- 一、同 四月 立命館大学予科講師
- 一、昭和三年四月 立命館大学予科教授兼専門学部講師
- 一、昭和十六年四月 立命館大学教授
- 一、昭和三十一年四月 立命館大学専任講師
- 一、昭和三十四年三月 定年退職
- 一、同 六月 立命館大学名誉教授

註異本堤中納言物語	國文	谷大	学	（昭和三年四月）
堤中納言物語評釈	文	献	書	院（昭和四年九月）
校註方丈記	平	野	書	店（昭和七年二月）
増訂堤中納言物語評釈	立	命	館	出版部（昭和九年六月）
保元物語太平記選釈	日	本	文	学社（昭和十年十一月）
平安朝物語選	白	帝	社	（昭和十一年一月）
堤中納言物語	白	帝	社	（昭和十二年十二月）
堤中納言物語詳解	要	書	房	（昭和二十九年六月）
堤中納言物語	弘	文	堂	（昭和三十年五月）

「惨風 悲雨」世路日記」試論

和田繁二郎

菊亭香水の「惨風世路日記」（明治十七年刊）については、神代穂亮・柳田泉・本間久雄の諸氏が詳述し、またその意義について述べておられる。しかし、多くの文学史のなかに、この「世路日記」に触れたものは、極めて乏しく、篠田太郎氏の「唯物史観より細たる近代日本文学史」、吉田精一氏の「明治大正文学史」、岡崎義恵氏編の「明治文学史・文芸編」等を数えるにすぎない。

神代氏は「明治文学名著全集・世路日記」（大正十五年刊）の解題で次のように言う。

「世路日記」は菊亭香水の仮号を以て佐藤蔵太郎の著作せる小説にして、「小説神髓」以前に於ける新様の作品なり。其の、所謂戯作より一步を進めたる点に於いて、又政治小説の先駆をなせる点に於いて、文学史上に一地位を占むべきものなり。発行部数より言はば、明治初期の小説中、恐らくは其の右に出づるもの無からむ歟。

ここに言う「新様の作品」の内容は、「戯作より一步を進めた」とこと、「政治小説の先駆をなす」とこの二者である。この後者の「政治小説の先駆をなす」という点について、柳田泉氏は、その著

「政治小説研究」において、

「惨風世路日記」の今本は、政治小説として見れば見らるるものであるが、著作の初めに於いては、これに政治的意図を寓するつもりは何等無かったのである。「世路日記」は中途で改題した題名であって、その初名を「月水奇譚艶才春話」といふ。これの執筆は明治十一年の由であるが云々

と言っている。この「艶才春話」は上篇（十四回）は明治十五年四月、中篇（十回）は明治十五年七月に出版されたもので、下篇はこれより二年の後の出版である。これは著者の多忙のため執筆が遅れたのであって、十七年四月、上中下の三篇を合冊刊行することになったのだが、ここで題名を改め「惨風世路日記」としたのである。

柳田氏の言う「初めに於いて」とは、この上中篇、すなわち「艶才春話」の部分について言っているのである。

ここで簡単に梗概に触れておこう。

青年教師久松菊雄は教え子の松江タケと将来を誓う仲となる。

同町の非行少年安井策太はかねてタケに思いを寄せていたが、久松との仲を知って、町のボスに働きかけ菊雄を避地の学校へ転任